保健のページ

●夏場に多い皮膚疾患についてご紹介します。

伝染性軟属腫(水いぼ)

覆うことのできる水いぼは、プール参加可能です。
ガーゼなどで覆うか、Tシャツやラッシュガード着用となります。
患部の化膿、つぶれそうな場合は、水遊びの活動を見合わせることがあります。
※子どもの豊かな体験を尊重し、可能な限り配慮を行います。その際には、保護者の方と
相談の上、実施いたしますのでご協力のほどよろしくお願いいたします。

伝染性膿痂疹(とびひ)

完全に治るまで、プールは参加不可となります。
医師の診断を受け、患部を露出しないように覆っていれば登園は可能です。覆うことのできない範囲、
病変が多発・広範囲に及ぶ場合には、園をお休みしていただくようご協力いただく場合もあります。
主治医とご相談の上、指示に従いましょう。手間をおしまないことで、結果的に軽症で済み、治療が早く済みます。
※ご質問などありましたら、職員までお気軽にお尋ねください。

●「けいれん」について知ろう

子どもの約 10%が「けいれん」を経験すると言われています。
乳幼児の「けいれん」のほとんどは「熱性けいれん」で、予後良好なことが多いのですが「けいれん」は突然起きるので、あらかじめ「けいれん」について確認しておきましょう。
「熱性けいれん」は、生後 6 か月～6 歳の子どもで多くみられ、全身性の「けいれん」を起こします。
発作は数分以内におさまることが多いとされています。

目の前で子どもが「けいれん」を起こしたとき、何を観察したらよいでしょうか？

・「けいれん」がいつ始まったのか
⇒園では、「けいれん」が 5 分以上続く場合には、救急要請を行います。
初めて「けいれん」を起こした場合には、通院をお勧めします。

・どのような動きをしているのか(全身が「けいれん」しているのか、左右差のある動きか？など)
⇒余裕があれば動画撮影しておくと、受診の際に状況がわかりやすいですが、子どもから目を離さないことが大事なので、身近にスマホなどがある場合のみで良いです。

・意識や呼吸状態に注意
⇒全身性の「けいれん」を起こしている場合には、非常に強い筋収縮が起きるので、周囲にぶつかったら危険なものがないか確認しましょう。また、唾液や吐物で窒息の可能性もあります。
顔を横向きにしたりして、誤嚥を防ぐようにしましょう。

参考文献:小児看護　2022.2 月号　看護師より